

ごみと森について紙芝居の文(絵:みかん)

「森がなくなっちゃう」

- ① ボクのおばあちゃんは、山のすそ野に住んでいる。自然がいっぱいでとってもすてきなところ。いつも、遊びに行くのが楽しみなんだ。
- ② おばあちゃんは森の仲間ととてもなかよし。沢からひいたきれいな水でおいしいお米も作っている。ボクが遊びに行くと、森のみんなが集まってきてくれるよ。
- ③ ここには時々、町から来た子どもたちも、探検・自然観察・虫とり・バードウォッチングにやってくる。田んぼで田植えや稲刈り体験もしているよ。みんなとっても楽しそう。
- ④ そんなある日のこと、この森や谷が「ごみ処分場」になるかもしれないって！平和で自然がいっぱいの森がなくなっちゃう。おばあちゃんや村のみんな、そしてなによりもその森に住んでいる動物たちはもうビックリ。

⑤ 「ごみ処分場」ってどんなところ？みんなよくわからない。とにかく一度見に行ってみよう。みんなで今ある処分場へ行くことに決めたよ。

⑥ 森の谷に作られたごみ処分場、そこはいろいろなものが混ざって捨てられた世界。どうしてもリサイクルできないごみでいっぱいだ。水たまりには油やヘドロみたいなものが浮かんでいる。積み上げたさらさらの黒い地面をみてみたら山に登ってみたら、靴の中に入り込んだ小さな金属がたくさん入っていたよ足にささってしまったよ。ふだんは目にしないところで、なかなか自然にかえらない細かくなっただけのごみが、たくさん埋められていた。

⑦ 僕らが出した「燃えるごみ」を燃やした灰が、黒い地面の正体だった。他のところをよくみると、細かく砕いたプラスチックや金属が埋められている。おもちゃのかけらを見つけたときこんなことを思い出した、「そういえば、この間ぼくは、すぐあきちゃうようなおもちゃを買って、予想通りすぐ捨てちゃったっけ」。あっちには、分別されなかった空き缶がころがっていたよ。ごみはごみの日に出せば消えてなくなったように思ってたけど、少し形を変えて、こんなところに集められただけなんだ。ごみは消えてなくなるわけでは決してなかった。

- ⑧ ぼくらがポイポイ簡単に、分別しないで捨てているごみのせいで、大好きな自然や森、そしてそこに住む動物たち、おいしいお米を作る田んぼは埋め立てられて、二度と戻ってはこないんだ。
- ⑨ ぼくたちが自然にかえらないごみをたくさん出し続ける限り、ごみ処分場は一杯になっちゃって、また次の森が、ごみ処分場として必要になるんだ。知らないうちに自然が、見えないところでどンドンつぶされていくんだ。
- ⑩ 森をなくしたら生きていけない動物たちも困ってる。先祖から借りた山や自然を、子どもたちにつないでいこうと思っていたおばあちゃんも、困っている。何よりも、山の泣いている声が聞こえてくるよ。
- ⑪ ごみ処分場はこんなゆたかな自然の中に作られます。ここが本当にごみ処分場になっちゃうのかな。そして、ここに住む動物たちはどうなるのかな。

⑫ もし、キミの家の横がごみ処分場になるって決まったら、どう思う。キミや家族の思うことを吹き出しに書いてね。

(書けたらみんなで発表しあう。)

⑬ これ以上、ごみで森が失われないためにどうしたらいいのか考えて、それを絵に描いてみよう。

(絵を描く。)

⑭ 「ありがとう、がんばってね。」

(発表したら「ありがとう、がんばってね」カードを渡して絵の右下に、のりで貼ってもらう。)